

## 日本最大級の科学コミュニケーションイベント サイエンスアゴラ

国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 科学コミュニケーションセンター 黒田 明子

### 1. はじめに

「サイエンスアゴラ」をご存じですか。サイエンスアゴラは「あらゆる人に開かれた科学と社会をつなぐ広場」で、目指すビジョンを「科学とくらし」とともに語り「紡ぐ未来」としています。様々な側面を持っていますが、最もわかりやすい活動のひとつが「2006年以降、毎年11月に東京・お台場地区で開催している日本最大級の科学コミュニケーションイベント」です。

11月のサイエンスアゴラは、国内外から関係者が集い、お互いの一年の活動を振り返り、総括し、次の活動につなげる場になっています。会場には、最先端の研究を進める科学者や、小さなお子さんに科学の楽しさを教えたいという親御さん、授業の参考にと訪れる学校関係者、理系への進学を検討している生徒たちなど、子どもから大人まで様々な人が集い、科学についての意見を交わす広場となります。当初は小さな規模での開催でしたが、回を重ねるに従って参加者が増えており、昨年(2016年)は9000人ほどの参加がありました(図1)。

#### ■サイエンスアゴラ2016実績

参加者数 **9,303人**

来場者	6,028
招待者	112
企画提供者	2,653
プレス	48
スタッフ、JST関係者等	462

※サテライト企画 \* JST 20周年記念フォーラム 未来共創イノベーションを目指して「とてもよい世界の作り方」(11月4日(金)に東京国際フォーラムにて開催)を含む

出展団体数 **175団体**

プログラム数 **214プログラム**

図1 サイエンスアゴラ2016実績

12回目となる2017年は、11月24日(金)～26日(日)の3日間で開催します。

### 2. 厳しい審査を経た選りすぐりの企画

サイエンスアゴラの企画は、開幕セレモニーや基調講演など幾つかの企画を除き、全て公募で集まったものです。例年3月～4月頃に募集を開始し、厳しい審査を経て採択が決まります。

これらの企画を提供しているのは、大学や研究機関に所属する科学者、普段から科学コミュニケーションを実施している科学館のスタッフや企業やNPO、次世代を担う中高生、大学生など。サイエンスアゴラは近年、若手研究者や大学生、中高生からの企画提供を歓迎し、より活発な交流ができる場づくりを目指しています。

### 3. 2016年は開幕セッション等で 中学生・高校生が大活躍



写真1 開幕セッション第二部のパネル討論の様子。司会の橋本和仁氏(左)と高校生3名。

昨年の開幕セッションでは、3つのテーマ(「医・食・くらし」, 「教育・文化芸術・スポーツ」, 「震災復興5年」)のうち、「震災復興5年」を重点テーマとし、この震災で私たちは何を克服したのか、残された課題は何なのかなど、東日本大震災からの5年間を多様な観点から振り返りました。

開幕セッション第二部のパネル討論「復興後の未来に向かって一高校生と考える震災復興5年」(科学技術振興機構 科学コミュニケーションセン

ター主催、写真1)では、東日本大震災、熊本地震で被災した高校生3人が登壇し、それぞれがショートプレゼンテーションを行い、科学者、ジャーナリストが加わって討論を行いました。災害に伴う情報インフラのあり方についての意見交換では、情報は個人任せの財産ではなく、道路や橋と同様に社会インフラとして強化を図る部分は強化するなど、社会イノベーションによって整えていく対応が必要ではないか、との考えも示されました。高校生が被災体験を通じて感じた「こうだったらよかった」という思いに科学技術はどう応えられるか、科学技術の恩恵を平等に享受できない格差を減らすための様々な仕組みをどうつくればよいか、という議論はこの場で完結できるものではありませんでしたが、これをきっかけに考えを深める動きにつながることを期待されます。

他にも、キーノートセッション「がん予防が切り拓く新しい社会」(がん予防の未来を考える会主催)、「震災から5年～いのちを守るコミュニティ～」(大阪市立大学 都市防災教育研究センター、東北大学 災害科学国際研究所主催)、「高校生×イノベーター トークセッション“Road to INNOVATION”～JST グローバルサイエンスキャンパス～」(科学技術振興機構 理数学習推進部主催)など、多数のセッションに高校生が登壇。未来社会を担う若手世代をパネリストに迎え、社会課題について世代を越えた議論が交わされました。



写真2 特設の「共創テーブル」で来場者と意見を交わす生徒たち。若者が描く福島復興後の未来と、科学・技術(ふくしまサイエンスがらっとフォーム spff 主催)

また、高校生、中学生が主体のブースは10企画ほどあり、いずれも来場者と積極的にコミュニケーションをとっていました。ブースには、親子連れの

ほか、事業者(企業)や研究機関の科学者が訪れることもあります。子どもにはわかりやすい言葉で話す必要がありますし、科学者相手なら専門的な対話に発展する事もあります。引率の先生に伺ったところ、期間中に場数を踏むことで、最終日には来場者に合わせた対応ができるようになっていくとのこと。



写真3 人気ブースは人だかりができるほど。テレビ局の取材もあり、大いに賑わう。

### 4. 話題の人やトピックで掘り下げる 注目セッション

サイエンスアゴラが目指すビジョンを示した開幕セッション「つくり、科学とともにある社会」の第一部は、米国下院議員を長らく務めた経歴を持つ米国科学振興協会(AAAS)CEOのラッシュ・D・ホルト氏と、株式会社ディー・エヌ・エーの創業者で取締役会長の南場智子氏の基調講演がそれぞれありました。このセッションの聴講を目標に集まった方も多く、注目度の高い企画でした。

ホルト氏は「科学とは、問いを發し、エビデンス(証拠)をもとに答え、理解を深める行為であり、透明性があり、誰にでも検証できる開かれた取り組み」だからこそ信頼できるものだと強調しました。一方で、科学者は研究に没頭しすぎて社会に対する説明が不十分になることがあり、一般の人びとも、科学者に対して、「あなたの解決しようとしている問いとは何か? その研究のエビデンスとは何か? 人びとにとってなぜその研究が重要なのか?」を尋ねるべきだ、とも。また、エビデンスに基づくという科学の姿勢は、公共政策の全てにも必要であり、その科学的思考法は誰にでも習得できるものだと付け加えました。

南場氏は、個人の体験をもとに、科学の成果を事業化する際のさまざまな困難とやりがいを語りまし

た。また、実際の産学連携の取り組みでは、研究成果を社会に還元してこそ真の研究であるとする科学者と出会い、協力を得て事業の立ち上げに邁進しますが、その過程で産学連携に立ちだかるいくつもの障壁にぶつかった体験を紹介しました。プロジェクトを進める上での課題をどう解決するか、という話は、自分自身の身に置き換えて共感された来場者が多かったようです。

サイエンスアゴラでは、基調講演の他にも、サイエンスアゴラのビジョンやテーマを体現する魅力ある企画を「キーノートセッション」あるいは「注目企画」として位置づけています。来場の際には、それらを目安に企画をまわることをおすすめします。

## 5. サイエンスアゴラ来場者の満足度

来場者としてサイエンスアゴラを楽しむ人は、市民が60%程度です。次いで企業が18%、科学者が12%、他は行政関係者や学校関係者が数%ずつ。市民は多くが家族連れで、子どもを対象とした実験教室も多数ありますが、前述の通り、社会と科学との接点を深く考えるための企画も多数あり、中高生の来場も少なくありません。特に、大学や研究所が実施するブースでは、最先端の研究成果について解説をうけたあと、来場者自らの意見も述べるなど、双方向のコミュニケーションが多く見られます。企画提供側の科学者にとっては、こういった場で聞いた意見がきっかけとなり研究が進むこともあるようで、貴重な情報収集の場にもなるのだとか。中高生にとっては、将来自分が進むかもしれない世界を体験するよい機会かもしれません。

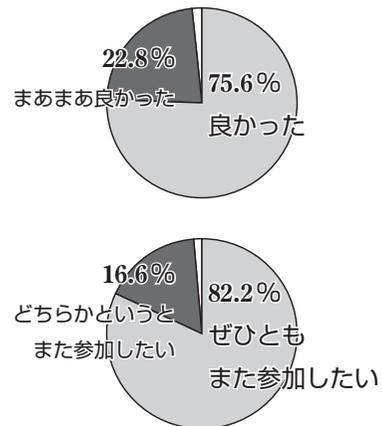


図2 一般来場者へのアンケート結果(回答数 1,025)

なお、2016年の来場者調査では、ほぼ76%が「来て良かった」と答え、「ぜひともまた参加したい」と回答された方は82%に上りました(図2)。

## 6. サイエンスアゴラ2017のテーマは「越境する」

2017年は「越境する」というテーマを掲げて公募を行いました。このテーマには「私たちひとりひとりが心豊かに生きていくために科学技術をどう取り入れていくのか、科学技術には何ができるのか、学問分野、立場、国、文化、世代の壁を越えてともに考える場としましょう」という思いを込めています。

今年のサイエンスアゴラに応募された方は、この「越境する」に関連し、来場される方々との対話を通じて自らの研究や活動を広げたいと考え、具体的な企画を形にされていました。サイエンスアゴラでブース出展をしている、またはセッションを実施しているのは、プログラム審査委員会の厳しい審査を経た、選りすぐりのコンテンツばかりです。サイエンスアゴラの公式サイト(<http://www.jst.go.jp/csc/scienceagora/>)では、9月22日(金)から全ての企画をご確認いただけます。中高生が登壇・実施する企画も多数ありますし、トップクラスの科学者と話せる機会を設けているブース等もありますので、ぜひ、興味深いコンテンツの数々をご確認ください。

## 7. サイエンスアゴラ2017の会場はテレコムセンタービル(東京・台場地区)

今年はテレコムセンタービルを会場として、「アゴラ」(古代ギリシャ語で「広場」の意味)の名のとおり、コミュニケーションの広場を造出し、空間そのもので上記のビジョンとテーマを体現する形をとります。サイエンスアゴラは、社会と科学のつながりを考える場を作るための運営を心がけていますが、純粋に「おもしろい」「楽しい」と思ってもらえるような仕掛けも用意しつつ、皆様をお迎えしたいと考えています。昨年は“タッチラリー”を実施しました。これは、自分が訪れたブースで来場者カードをタッチし、訪問数に応じて飲み物がもらえるというものでした。今年はタッチラリーの結果を用い、人気の企画などもリアルタイムで紹介できるよう準備を進めているところです。

## 8. おわりに

科学って難しそう、と考える人は多いかもしれませんが。自分には関係がない世界と思う人も少なくないでしょう。けれど、私たちの暮らしには、すでに多くの科学や技術が使われています。スマホやタブレットでその場にはいない友人とコミュニケーションをとれるのも、エアコンのスイッチを入れれば暑さ寒さをしのげるのも、科学の成果のひとつです。身の回りのもので、そういった成果が反映されていないものは無いと言ってもいいくらい、科学は身近なものです。サイエンスアゴラをきっかけに、私たちをとりまく科学に興味を持っていただければ幸いです。

## サイエンスアゴラ 2017

日程:2017年11月24日(金)~26日(日)

会場:テレコムセンタービル

東京都江東区青海二丁目5番10号

ゆりかもめ「テレコムセンター」駅直結

主催:国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)

共催:日本学術会議

国立研究開発法人理化学研究所

国立研究開発法人産業技術総合研究所

東京臨海副都心グループ

特定非営利活動法人 natural science

特定非営利活動法人産学連携推進機構

神戸市

福岡市科学館

セコム株式会社

株式会社早川書房

参加費無料(一部材料費負担あり)

プログラム詳細は、2017年9月22日(金)にサイエンスアゴラの公式サイトで発表予定

<http://www.jst.go.jp/csc/scienceagora/>

公式サイトで詳細をご確認のうえ、11月24日(金)~26日(日)の期間中に会場にお越しください

